

資料7

第2回肉用牛研究会

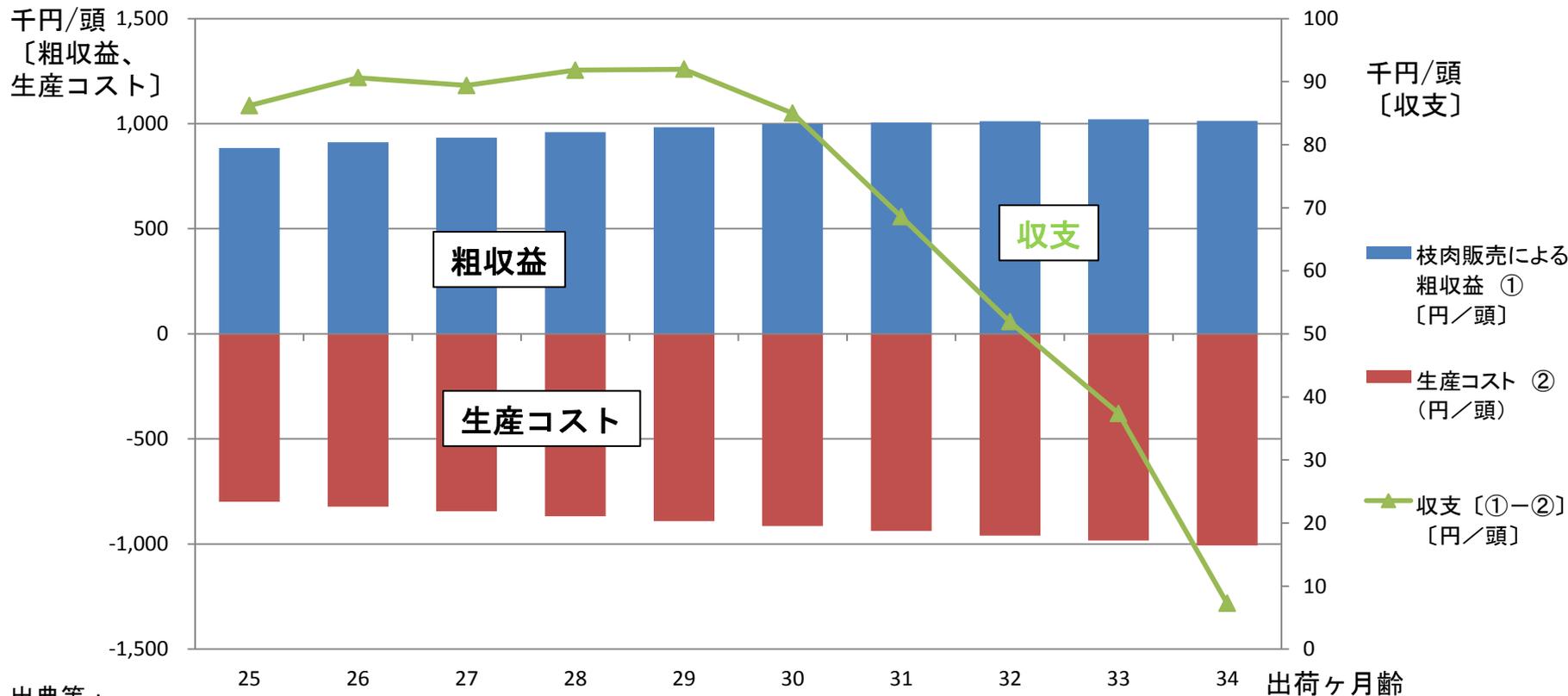
補足説明資料

肥育出荷牛月齢毎の収支分析（試算）

- ・全国的なデータから試算した場合、肥育期間が長期化すると、生産コストも増加することから、30ヶ月齢以上では収益性が低化
- ・一方、出荷月齢が26～29ヶ月の間は収益性に大きな格差が見られないところ

【留意事項】

実際に出荷された肥育牛の数値ではなく、一定の前提の元で、モデル的に試算したもの



出典等：

【粗収益】

枝肉価格と枝肉重量から算出。枝肉価格については、肉用牛肥育経営安定特別対策事業の平均枝肉価格「1,946円/kg」を肥育牛出荷月齢の平均値29ヶ月齢時点の枝肉価格とし、他の出荷月齢時の枝肉価格は「BMS」に係る格付成績〔牛枝肉格付情報（25年度公社）日本食肉格付協会〕の価格の変化率を用いて試算。枝肉重量については、全国枝肉DB事業により収集したデータの中から、特定系統（増体系）の種雄牛〔後代数の多い上位5頭〕由来の去勢肥育牛の成績（24年度）をとりまとめた数値

【生産コスト】

肉用牛肥育経営安定特別対策事業の平均生産コスト（25年度各月の単純平均）を、肥育牛出荷月齢の平均値29ヶ月齢時点の生産コストとし、他の出荷月齢時の生産コストは、もと畜費を除いた生産コスト（各月の単純平均）を月齢に応じて加減して試算

「おいしさ」の指標化について

「おいしさ」の指標化に係る 検討状況

【全国肉用牛振興基金協会】

- (1) 食味向上に寄与する「オレイン酸」（融点が低く、口どけの良い脂肪）測定のための手法を確立
- (2) 食感に関与する牛肉の成熟度〔しまり〕の評価手法の確立に向けた検討を開始

【家畜改良センター】

消費者を対象とした官能評価を行うなど、牛肉中の成分との関係から、「おいしさ」に関する評価指標を検討しているところ

【家畜改良事業団】

後代検定調査牛を対象に「おいしさ」に係る成分分析等を実施。その分析結果と種雄牛間差について分析を実施しているところ

ブランド化等への取組

- 鳥取和牛オレイン55
脂肪の質という「新しい牛肉の評価基準」を活用したブランド化

〔認定基準〕

- ・オレイン酸含有率が55%以上
- ・肉質等級3等級以上 等

上記のように、オレイン酸に着目したブランド化の取組は、

- ・能登牛（石川県）
- ・信州プレミアム牛肉（長野県）
- ・豊味の証（大分県） 等

においても、実施。

子牛生産指数について

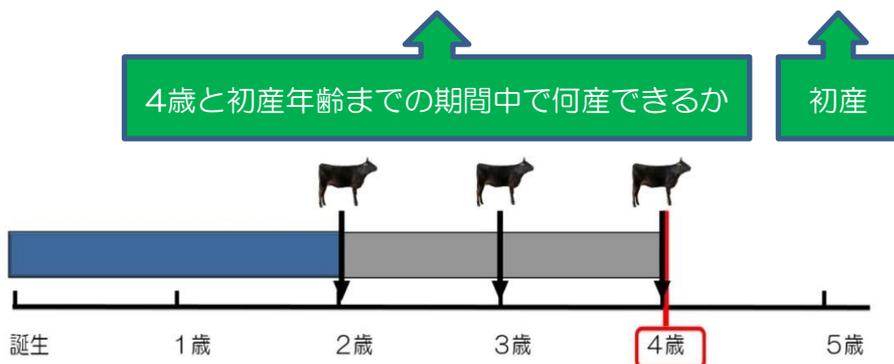
子牛生産指数とは

- 初産月齢と分娩間隔を総合的に評価できる指標
- 4歳時点で得られる子牛の数を指標化

子牛生産指数の指標化について

初産月齢と分娩間隔については、両者バランスのとれた繁殖性の向上が図られることが望ましいことから、当該指数を参考指標として記載することを検討

<式>
子牛生産指数 = $\frac{4 - \text{初産年齢}}{\text{平均分娩間隔 (年)}} + 1$



(注) 仮に初産月齢が24ヶ月齢であっても、その後の間隔が空けば低下する

【平成20年生】 2.77

(参考)

初産月齢 : 24.7ヶ月

分娩間隔 : 13.3ヶ月

[出典 : 全国和牛登録協会]

(例)

24ヶ月齢時 1産目
(2歳) ↓ (13ヶ月)
37ヶ月齢時 2産目
↓ (13ヶ月)
50ヶ月齢時 3産目



50ヶ月齢 : 3産
= 48ヶ月齢
: 2.85産

繁殖雌牛の体型目標について

考え方

- ◎ 体型については、繁殖雌牛（成熟時）の現在値の把握に困難な面があるところ
- ◎ 一方、体型は、枝肉重量などとは正の相関、分娩間隔とは負の相関があるとされることから、生産者のための適正な水準を引き続き提示すべきとの意見もあるところ
- ◎ このため、現在値に係るデータ収集方法等について変更を加えた上で、これまで同様に定量的な目標を設定することとする。（ただし、将来的にはデータ収集方法等については、更に検討）

改良増殖目標（案）

		体高	胸囲	かん幅	体重	備考
黒毛和種	現在値	130	187	47	487	成熟時
	目標値	130	190	48	520	
褐毛和種	現在値	134	196	50	585	
	目標値	134	200	50	600	
日本短角種	現在値	133	199	49	585	
	目標値	133	203	51	600	

出典：黒：基本・本原登録（24年度）から推定
 褐：繁殖登録（24年度）から推定
 短：本登録（24年度）から推定

注：前回22年度の現在値については、家畜改良センターで飼養されている牛のデータ等を用いたが母数が少ない等の問題もあったところ。このため、今回は、上記のとおり、各登録団体のデータを基に現在値を推定。

(参考1) 畜産・酪農生産力強化緊急対策事業 (27年度新規予算要求事業) うち酪農経営改善緊急対策

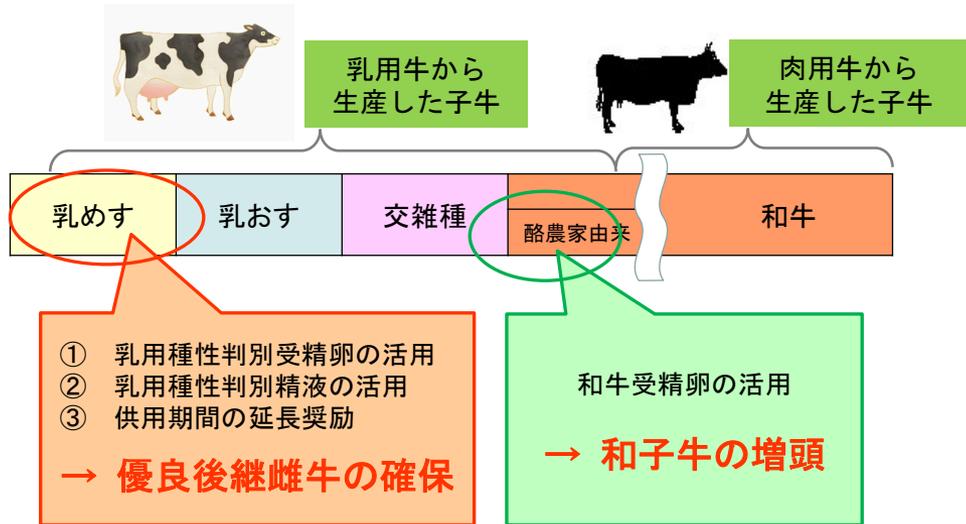
現状

- 酪農経営においては、交雑種子牛の生産が増加する一方で、乳用種後継牛の減少が懸念
- 和牛繁殖基盤の縮小により、和子牛が減少傾向

課題

- 酪農経営における受精卵移植・性判別技術等の活用や供用期間の延長の取組により、酪農由来の和子牛生産の拡大と生乳供給力の向上を図ることが必要

対応方向



左記の実現に向けた支援策

- ① 性判別受精卵・精液を活用した有用後継雌牛の確保、和牛受精卵を活用した和子牛生産の拡大等の経営改善に向けた計画的な取組
- ② 乳用牛の供用期間延長等のための器具整備
- ③ 性判別精液生産機器等の導入
- ④ 和牛受精卵等の生産拠点の機器整備
- ⑤ 受精卵移植技術の高位平準化のための実技研修会等の開催

効果

酪農経営の
収入の増加

国際競争力のある和牛
肉生産への構造転換

(参考2) 畜産・酪農生産力強化緊急対策事業 (27年度新規予算要求事業) うち肉用牛繁殖性向上緊急対策

現状

- 小規模・高齢者層を中心とした生産者の離脱等を背景に肉用子牛の更なる生産減が懸念される状況。
- 一方、繁殖雌牛の繁殖成績の低下により、年間10万頭程度の和子牛の増産余力が活かされていないところ。

課題

- 生産者の経験や勘に頼った発情発見や人工授精の実施では、繁殖雌牛の能力を最大限発揮させることが難しいことから、センシング技術や情報通信技術といった新技術を活用した繁殖供用率の向上が必要。

対応方向

- センサーから得られる歩数や体温等から、自動的に人工授精の適期等を判断する装置の導入
- 血液成分等の結果に基づいた疾病の早期発見や飼養管理の改善・指導
- クラウド上の繁殖データ等を活用するためのデータ連係体制の整備
- 繁殖成績の向上や効率化に資するための発育・栄養度といった形質や発情周期等の指標を測定・分析する新たな技術の実証

効果

分娩間隔の短縮による生産性の向上
(13.3ヵ月→12.5ヵ月)

肉用子牛の増産
(繁殖能力の最大限の発揮)

